

関連性理論と表象の疫学

—— ダン・スペルベルが考えてきたこと ——

芦 川 晋

『中京大学現代社会学部紀要』 第9巻 第2号 抜刷

2016年3月 PP. 189~228

関連性理論と表象の疫学

—— ダン・スペルベルが考えてきたこと ——

芦 川 晋

0. はじめに一象徴表現とは何か

本稿の第一の目的は、ダン・スペルベル&ディアドリ・ウィルソンが発展させた「関連性理論」の構成を、その主著である『関連性—伝達と認知』(SP: 1995=1999)をたどりながら概観することである。関連性理論に言及した論文ではたいてい「関連性」の概念に焦点が当てられ、さらにこれを応用した語用論的分析に向かっていく。しかし、ここではむしろ関連性理論を導出してくる演繹過程のメカニズムに焦点をあて、その理論構成を吟味し、可能と思われるいくつかの補足を加えながら、あわせてその構成上の難点について考察を加えてみたい。ついでに、ダイアン・ブレイクモアの理解 (DB: 1992=1994) も適宜参照し、批判を含めた私見も加えてある。なお、ここで指摘する難点はかつて西阪仰[1995]が指摘していた批判とほぼ同じものになった。ただし、注目したポイントは異なるので、少しは意義もあるだろう。

また、ダン・スペルベルは理論人類学者としても知られている。スペルベル個人の「人類学」的業績を参照すると、「関連性理論」を提起する以前からその原型となるような議論を展開しており、また、以降も「関連性理論」を一つの基礎とするような議論を繰り返してきたことが分かる。スペルベル&ウィルソンが関連性理論で提示する演繹過程のメカニズムは、当然、こうした一連のスペルベルの議論とも連続的な関係にたつ。私見で

はこの二つをつきあわせた議論は寡聞にして知らない。だが、この二つをつきあわせることは、双方の議論の理解を容易にするうえでも役に立つであろう。そこで、本稿の冒頭と末尾では、簡単にではあるが、『関連性－伝達と認知』に前後するスベルベルの議論についても関連性理論を意識しながら言及してみたい。

スベルベル&ウィルソンにとってコミュニケーションとは何よりも個人の認知環境を効率的に変化させる手段であって、こうした枠組み上、自然言語はコミュニケーションにとって決定的に必要な要素とはなりえない。スベルベル&ウィルソンの言い方にならえば「発話」とは内面的な思考の「解釈」である。そして、認知環境を変化させる心のメカニズムの中心として「演繹規則」が据えられ、演繹過程がはたらく要件として「文脈効果」を想定している。

まず、こうした認知主義的な発想は、人類学と心理学を結びつける D・スベルベルの理論人類学の考え方をそのまま引き継ぐものであり、スベルベルの構想する「人類学的解釈」も「関連性理論」の枠組みに位置づけることが可能になるようなものとして展開されてきた。実際にも、「関連性理論」のなかで採用される概念やその先触れとなる概念のいくつかは、以前の著書にも散見される。なかでも、「関連性」、さらには「演繹」と「文脈効果」に相当する概念が既出であることはとりわけ注目に値するであろう。

たとえば、『象徴表現とは何か』の序において、すでに「象徴表現は認知の装置である」、「象徴装置のいくつかの基礎原理は、経験から帰納されるものではなく、逆にそれらは、経験を可能にする生得の、心の装備ではなかろうか」(IDS: 1974=1979] 11-12 頁)と言われているし、『人類学とは何か』の序論では次のようにさらにはっきりと述べられている。「人類に共通する固有な属性とはなんなのか。——。もしも、人類がなにか共通かつ固有のものをもつとするなら、それは人類にさまざまな言語、文化、社会制度の発達を可能にする精神能力のはずである」。「文化人類学は、

人間の精神能力のさまざまな集合的発現を研究する。文化とはそうした発言のことなのである。だから、原理的に言って、人類学と心理学とは緊密で豊かな関係を結ぶべきだろう。というのも二つの学科は人間精神という同一対象の、ことなる発現の諸形態をとりあつかうからである」（[DS: 1982=1984] 9-10 頁）。これは後に「表象の疫学」と呼ばれるようになり、「理論人類学は人類文化の変異可能性を説明する任務を負う」（[DS: 1982=1984] 29 頁）という課題は、「なぜある種の表象は広範囲に共有されるのか」という形で問いが具体化されていく（[DS: 1986=2001]）。

こうしてみれば、「関連性理論」はこのうちの心理学的部分を理論化したものとも言えるし、後で見ると「関連性理論」で定義される「解釈」という概念は、人類学にあたって神話や儀礼といった「象徴的表現」を「解釈」するとはどのようなことなのかを、理論化する作業の行き着いた先とも言える。「関連性理論」で定義される「解釈」のなかに人類学における「象徴的表現」の「解釈」もうまく位置づくようになっているのである。

そこで、さしあたり『象徴表現とは何か』（1974）と『人類学とは何か』（1982）の議論を念頭に該当するモデルを簡単に紹介してみよう。いずれの議論においても、スペルベルは、従来的人类学における神話や儀礼といったフィールドワークの成果（象徴表現）の解釈の仕方に疑問の目を向け、象徴を解釈するとはどういうことかを吟味する。『象徴表現とは何か』の後段や『人類学とは何か』の「解釈民俗学と理論人類学」（第1章）、「一見して非合理的な信念」（第2章）、「象徴思考は前理性的か」（付録）で提示される議論は、採用されるタームや細部については違いがあるものの、象徴を解釈するとはどのようなプロセスかを説明しようとした点では変わりがなく、大枠は次のようなものだといってよい。

「解釈民俗学と理論人類学」では、後に「関連性理論」で見いだされるように、記述と解釈・複製が区別されている。このとき、「記述」は真理値を持つ一方、「解釈・複製」は間接話法化することで間接的に真理値を問えるようになる（誰々がこう言った）。人類学的知見は、インフォーマ

ントからの報告（神話、儀礼など）の集積として、当然、間接話法化して扱われるものであるし、しばしば、それ自体では理解不能である。つまり、表象（誰かが言ったことの）の表象（メタ表象）として「解釈」の対象になる。だから、「人類学者の任務は文化的表象を説明すること、すなわち社会集団によって特定の表象が選別され共用されるように作用する機制を記述することである」ということになる（[DS: 1982=1984] 73頁）。このプロセスを、スペルベルに従って、より抽象的に説明しなおして見よう。

まず、「象徴」は記号ないしコードではない。象徴はある対象の「表象の表象」である。①刺激が新しい情報として「知覚装置」に入力されると（「基礎命題」となり）、（「意味論的カテゴリー」の適用を受け）「概念的表象」として「焦点命題」化される。②あわせてこの「焦点命題」と「百科事典的知識」（長期的な記憶）とを整合させるよう「象徴装置」がはたらき（「象徴的呼び出し）、③「焦点命題」と「百科事典的知識」とを論理的に整合させる「補助命題」（演繹の前提）が形成される（「命題表象」）。④この結合（「理性的処理」）がうまくいかないとき（「半命題表象」が形成される）、言い換えれば「関連性」が見いだされないとき、⑤「焦点命題」は括弧（引用符）入れされて「象徴装置」に回付される。こうして命題が「象徴」として処理されるとき、焦点を変えて多様な解釈のうちもとも「関連性」のあるものが選ばれる。

つまり、刺激にあわせて「新しい情報」が入力されると、「象徴装置」が働いて新しい情報を処理するための「古い情報」（記憶など）が象徴（文脈）として呼び出され「演繹」の前提になる（後述する「文脈効果」に相当）。こうした前提にもとづくため、この演繹過程（「理性装置」の働き）は真偽にかかわらない（後述）。一方、論理整合性がなく（「半命題表象」として）、この演繹過程からはじかれてしまう場合、この「新しい情報」は「象徴」として「解釈」の対象になる。スペルベルは、この「解釈」の対象の例として、詩的テキスト、匂い、イロニー、世界像をあげている。「象徴」は文脈形成と解釈のために利用されるのである。では、こうしたスペ

レベルの議論が、スペルベル&ウィルソンの「関連性理論」のどこにどのよう位置づけるのか「関連性理論」を吟味してみる段である。なお、邦訳からの引用にあたっては一部、訳文や訳語を訂正したところがある。

1、コミュニケーションはそれ自体でそれ自体についての期待を作り出す

まず、スペルベル&ウィルソンが注目するのは「言語コードに依存しない」（蓋然的な）推論に頼ったコミュニケーションが存在するということであり（1）、そこから、コミュニケーションで問題になるのは言語以上に人間の認知に関わる事柄であり、言語はその効率性をあげるものにすぎないと考えられている。もちろん、この意義は軽くない。ちなみいずれにせよ、スペルベル&ウィルソンが言語コードを基礎に据えようとしなのは、以下のような難点が生じるとするからである。

まず、スペルベル&ウィルソンは文と発話を区別する。文（sentence）は意味を表象し、発話（utterance）は思考を伝達する。しかし、同一文を使った異なる発話は解釈が異なる可能性があり、実際、たいていの場合、解釈が異なる（[SP: 1995=1999] P.9=10 頁）。しかも、発話は思考だけでなく、態度（「命題態度」や「発話内の力」）を伝えるし、明示的な表現が非明示的な思考を伝えることもある。つまり、文と発話の間には隔たりがある。この隔たりを言語コードで埋めようとするれば、言語レベルの文法的なコード解読に加えて、語用論的なレベルのコード解読が必要になる。

たとえば、この隔たりを埋めるために（演繹的な）推論規則を採用して説明を試みることがある。とはいえ、このとき推論規則が送り手と受け手で同じように働くためには共通の前提集合が必要になる。前提集合が異なれば受け手は解釈を間違えることになりかねない。この共通の前提集合は一般に「文脈」として知られている。受け手が正しい解釈にたどりつくには、文脈情報として送り手、受け手がそれぞれ共通の前提集合をもっているだけでなく、それが「相互知識／共有知識」（mutual knowledge）になって

いなければならない。これは一般に「相互知識問題」と呼ばれてきた。「論点は、聞き手が必ず正しい解釈、つまり話し手が意図していた語りの解釈を復元するためには、発話解釈に用いられる文脈情報はすべて話し手と聞き手が知っているだけではなく、相互に知っている知識でなければならないということである」([SP: 1995=1999] P.18=21 頁)。

しかし、共通の前提集合を有していることを知っているなら、さらにそのこと自体が相互知識になっているかどうかの問題になりえ、この作業は無限に続く一方で、相互知識はますます成立しそうもなくなる。逆に、発話解釈で問題になる潜在的な文脈をあらかじめ限定しておこうとしても、そのなかからどの想定が選ばれるかは決定できない。たとえば、「リンゴが3つ、ミカンが5つあります。全部でいくつあるでしょう？」という発話は、算数として考えれば8つだが、リンゴとミカンは比べられないから、そのまま同じことを答えて繰り返しても間違いではない。二つの解釈がいずれも可能であるし、相手の実際の思考がどちらか分かっていたとしても、あえて意地悪をすることもできる。つまり、原理的にどちらかを決めることはできない。

他方、コミュニケーションは、稀なケースかもしれないが、言語コードに頼らなくても可能ではある（「仕草」等々。しかし、これは本当に「自然言語」に依存していないのだろうか？）。グライス ([Grice: 1989=1998]) はこの隔たりをコード化して埋める代わりに「協調原理」と「会話の格率」を用いてコードに頼らない（蓋然的な）「推論」で埋めようとした。グライスは協調原理と会話の格率の適用を維持するために補充される想定や結論を「推意 (implicature)」と呼ぶ。グライスは言語的意味のかなり広範囲の問題を「推意」によって扱おうとしたのである。

相互知識が哲学上の構築物だとしても、コミュニケーションの過程自体が共有情報を生み出すし、コミュニケーションを説明するにも共有情報の概念を何らかのかたちで織り込まなければならない。グライスの基本的な考え方は、ある行為が受け手にコミュニケーションとして同定されると、

送り手はある一般的基準（格率）を満たそうとしていると考えるのは妥当だということである。そうすれば、逆に送り手は受け手を制約するために、行為が一般的基準の原理と調和するはずという聞き手の想定を利用することもできる（[DB: 1992=1994] p,128=179 頁）。さらに、言えは「話し手は自分が理性的であると仮定されない限り、言いかえればある基準あるいは規範に一致していると思われない限り、コミュニケーション行為をしていると仮定されない」。つまり、コミュニケーション自体が期待を作り出し、この期待を利用するというわけだ。スペルベル&ウィルソンはこうしたグライスの方向性を心理学的に発展させる形で関連性理論を展開する。

2、認知環境と顕在性、意図直示行為

人間は同じ物理的世界にすみ、この共通の環境から情報を引き出し、できるかぎり最高の心的表象を構成しようとしている。各自の表象が異なるのは、物理的環境と認知能力が異なるからである。個人は各自こうしたかたちで「認知環境」を構成し、個人にとって「顕在的な事実」がこの認知環境を構成する。なお、ある事実が個人にとって「顕在的（manifest）」であるのは、その時点で個人がある事実を心で表象し、その表象を真ないし蓋然的に真であると受け入れられる場合のみである。そうすると、顕在的であるためには、なんらかの事実が知覚可能、ないしは推論可能でなければならない。だから、個人の総合的認知環境とは、当人が知覚可能ならびに推論可能な事実、つまり認識可能な事実全体の集合であるということになる。

ところで、どんな想定（assumption）も個人にとって真偽には関わらず顕在的であり得る。だから、個人にとって顕在的であるということは、自分が実際に知っていたり、想定していることよりも明らかに弱い（「甘利のスキャンダルは米国にはめられたからかも」）。しかも、噂のように自分が立てたものではなくても自分にとって顕在的な想定というのはいくらかでもある（「だって高村がそう言ってる」）。のみならず、「知っている」や「想

定している」よりも「顕在的である」が弱いのであれば、「相互顕在性」も「相互知識」や「相互想定」より弱い（「そう思ってるのはオレだけじゃないと思うよ」）。

たとえば、お互いの認知環境が交差していれば、同じ事実や想定が顕在的な場合がある（「いまのはヨコハマメリーさんですよ」）。あるいは一定の認知環境を利用できる人間の特徵付けがあり（たとえば、「日本会議のメンバーである」等々）、ここでも認知環境の共有という想定を含んだ認知環境を共有できる（「みんな「憲法は変えるべきだ」と思ってるんだよ」）。誰かと共有していることが顕在的であると共有されている認知環境を「相互認知環境」と呼ぶ。「相互知識」や「相互想定」においては、実際には無限の知識や想定を相互に立てることができない一方、これに真理値をわりふろうとするかぎり有限の操作では相互性を達成できない。しかし、相互顕在性の主張が問題にしているのは認知環境であり、相互に顕在的であるためには、真理値を割り振る必要もなく、問題になるのは顕在性の強弱だけである。逆に、たとえ相手と認知環境を共有しており、相手にとって顕在的であることの直接的な証拠があっても、この証拠は決して決定的なものではありえない。認知環境の境界線を厳密に決定することはできないのである（この部分だけをみるかぎり、発想がアルフレッド・シュッツにかなり近い）。

というわけで、「個人の認知環境は当人にとって利用可能な想定集合である」。一方、「人間は効率的な情報処理装置である」（SP：1995=1999] p.46=55 頁）。では、想定集合のなかから実際に個人が引き出す想定はどのようにして決まるのだろうか？人間の認知は個人の世界にかんする知識を向上させることを目的としている。情報のなかには古いものも新しいものもある。古い情報と新しい情報を組み合わせて推論過程の全体として一緒に用いた場合、さらに新しい情報が引き出せることがある（「アイツ、最近つきあい悪いな」、「彼女でもできたんじゃないか」）。新しい情報の処理がこのような相乗効果を引き出せるとき「関連性」（relevance）がある

と呼ぶ。人間はもっとも効率的な情報処理をめざす。つまり、個人の認知目標は、ある時点で処理される情報の関連性を最大にすることである。

われわれは相手に何かを気づかせようと意図することがある。このように、何かを顕在化しようとする意図を顕在化する行動を「意図直示行為」(ostensive behaviors)と呼ぶ。情報処理には労力が伴うので、なんらかの見返り（関連性）が期待される場合にしか着手されない。意図直示(ostension)はこうした関連性を保証し（「関連性の原則」）、人間の思考に関する証拠を提供する。スペルベル&ウィルソンによれば、これがコミュニケーションなのである。「関連性の原則は意図直示推論的コミュニケーションについての一般原則である」(DB: 1992=1994 p.162=198頁)。

さて、ことのとき受け手は意図直示から二段階の情報を手にする。まずは、指摘されている情報（「情報意図」informative intention）であり、次に、この情報が意図的に指摘されているという情報（「伝達意図」communicative intention）である。第1段階は第2段階を必要とせず気づく場合もあるが（「腰が痛い」とつぶやく）、第2段階の意図直示に伴う（伝達）意図の認識は効率的な情報処理に必要である（「腰を揉んで」と頼む）。場合によっては、この伝達意図を考慮しなければ、基本情報（情報意図）の一部がまったく顕在的にならないこともある（「非自然的意味」non-natural meaning）。たとえば、入学試験で試験監督が自分の傍らで「受験番号の記入もれがないか注意してください」と繰り返す。その言い方がどこか不自然なので、ふと解答用紙をみて自分が受験番号を書き漏らしていることに気づく。ちなみに、このケースではこの繰り返される注意が何を意味するかをあらかじめ知っている必要もない。このように直接、証拠を示すものから、はっきり何かを言って間接的に証拠を示すものまで（「ズボンのチャックが開いてるよ」）、詩歌のように漠然とした効果から明確な効果にいたるまで「意図直示」は連続体をなしている。だから、スペルベル&ウィルソンにしたがえば、言語コードはこうした効果を強化するために用いられるのであって、コミュニケーションに不可欠の要素ではな

い。

以上から、スペルベル&ウィルソンは、この第2段階に相当する「情報意図」を、受け手の思考ではなく、受け手の認知環境を直接改変しようとする意図であると考え。すなわち、情報意図は受け手にある想定集合を顕在的、ないしはより顕在的にする。一方、第1段階に相当する「伝達意図」は、送り手が情報意図を抱えていることを、送り手と受け手相互に顕在化することになる。このとき伝達意図は送り手と受け手の相互認知環境を変えている。というも、情報意図の達成が受け手に委ねられていることを相互に顕在化するし、情報意図の伝達に成功したがどうかも相互に顕在的になるからである。伝達意図は言ってみれば情報意図の所在を示す「情報意図の情報意図」であり、情報意図を補完するものにすぎないわけである(2)。

2. 「非論証的」な演繹と「文脈効果」

このようにスペルベル&ウィルソンは、コミュニケーションの問題を人間の認知能力の問題に還元したうえで、人間の心の能力の中心に演繹を置き、演繹操作が生み出す文脈効果で関連性がはかれると考える。演繹能力に基礎をおくという意味で人間はロボットである。ただし、演繹的な推論が人間の心の能力のすべてだとしながらも、その過程で蓋然的な推論をも許容できるようにするところがスペルベル&ウィルソンの議論の面白みである。

スペルベル&ウィルソンによれば、人間の(演繹的)推論は「非論証的」な過程であり、受け手は利用できる概念として表象された情報すべてを推論過程の前提として用いることができる。推論は瞬間的であり、しばしば間違いうる。この結論にいたる「非論証的」な推論過程は創造的な「仮説形成」と推論規則に支配された「仮説確認」からなる。つまり、仮説形成は創造的想像(「象徴」)の問題であるが、仮説確認は推論規則に支配された純論理的な過程である。そうはいつても、人間の心に自然発生的に呼び

出される論理規則は演繹規則のみであり、仮説形成にあたっては「演繹規則」が使用される。ただ、それが仮説形成過程のすべてを支配しているわけではない（先に「後述」とした部分）。

まず、「非論証的推論」である仮説過程では、ある表象が論理的処理を受けるにあたって「適格」でありさえすればよい（たとえば「述語演算型」）。真偽を問えるのは「完全で命題的な論理形式」の場合である（たとえば、「百科事典的知識」）。一方、「不完全で非命題的な論理形式」は、統語的には適格であり（たとえば、代名詞を含む文）、「想定図式」として概念的記憶のなかに蓄積され（「女の涙にゃかなわない」）、文脈情報にもとづいて完全な想定に変換できる（「田中真紀子は女である」）。ここでは仮説（想定）の真偽ではなく、仮説（想定）の強さを問うために演繹（的推論）がはたらく。

こうした背景には、世界に対する真の描写として思い抱かれながら、明示的に表象されていない基本的な想定（信念や想定のような明示的に表象されない命題態度）があるからであり（「女は弱い」？）、これを「事実的想定」（factual assumption）という。世界にたいする表象は事実的想定を携えており、その一部は基本的なものである。そして、事実的想定を思い抱く確信度には強弱があり、強い想定はそれだけ呼び出し可能性（accessibility）が高い。想定はこの強弱は習慣づけやそれがどのように獲得されたかに由来する。また強い想定は真である可能性が高い。こうした事実的想定には、知覚、言語解読、記憶に蓄えられた想定や想定図式、さらには演繹に由来するものもある。ある想定集合が前提として与えられれば、演繹過程からさらに想定を派生させることができるからである（「田中角栄の娘と言っても、彼女も女の子だったんだね」）。

このように人間の能力の中心にある自然発生的な遂行能力はこの演繹規則に由来する。論理形式、とりわけ想定のみ命題形式は「構造化された概念」の集合であり、概念として記憶に蓄えられている情報は三つにわけられる。①ある概念の「論理的記載事項」（logical entry）は、論理形式に適

用される「演繹規則の集合」からなり、算定的で削除規則としてはたらく。

②「百科事典的記載事項」(encyclopedic entree)は「概念の外延」にかかわる情報を含んだ表象である(「女は弱い or 強い」)。③「語彙的記載事項」(lexical entry)は概念に対応する「自然言語の語彙項目」が入っており(ここではすでに日本語として言語化して説明しているわけだが、それ以前の段階があるということである)、こうした語の「意味」は概念から与えられる。

この論理的記載事項(演繹規則の集合)は前述のように「削除規則」(eliminate rule)としてはたらし、「非自明的論理的含意」をもたらす。たとえば、ある想定集合の情報処理にあたって前件が連言ないし選言の複合文からなる場合、この前件全体を見つけるよりもその構成要素である連言誌ないし選言肢を見つける公算が高いだろう(たとえば、ある一連の事実の記述のなかでその人物が「女」であるということに注目するような場合)。このように演繹規則は削除的に働き、記憶する必要のある想定を減らし、想定集合の内容を展開して新しい結論(非自明的論理的含意)を引き出せるようにする。このとき、単一の想定のみを入力とする分析的規則と、複数の独立の想定を入力とする総合的規則の二つを区別することができ、必要十分な見解に立つ分析的含意は元の想定を復元できるが、総合的含意は元の想定を復元可能できるか疑わしい(個別の命題から「女」はすべて〇〇だなどと言えるわけがない)。

こうして、旧情報と新情報の二つの想定結合から、新しい想定集合が総合的に「文脈含意」として生じる。これを「文脈効果」(contextual effects)と呼ぶ。さらに、文脈効果には他にも新情報が旧情報にさらに証拠を与える「文脈強化」の場合と、新情報が旧情報と矛盾する証拠を与え、最初の想定を「除去」させる場合がある。一方、旧情報の繰り返してしかない新情報、旧情報と《関係のない》新情報は文脈を改変したり改善することがない。

ところで、結論の「確認値」は、前提の連言の確認値より低いというこ

とはありえない。連言は連言肢よりも確認値が高いということとはありえないからである。「ある特定の結論の派生に効果的に用いられた前提がすべて確実なら、その結論のまた確実である。一つを除いてすべての前提が確実なら、その結論は確実とは言えない前提の強さを受け継ぐ。複数の前提が確実とは言えないなら、その結論は最も弱い前提より弱い」〔SP: 1995=1999〕 p.111=133 頁）。

なお、④言語コミュニケーションの場合にはさらに「遡及的強化」(retroactive) も考えられる。文脈化で実際に用いられる想定を強化するのが、当の文脈化でなんらかの期待された結果をもたらしていることによる場合である。たとえば、ある発話が十分に「関連性」があるという解釈にたどりついたとき、この解釈が送り手の情報意図としてかなり確信を持てるようなときがそれである。いずれにせよ、この四つは文脈間の関係を比較することで文脈効果を生み、このときはたらく演繹の過程で想定の高さが決まってくる。

3、文脈の「呼び出し可能性」と「関連性」

スperlベル&ウィルソンは、第2章「推論」の章で、演繹過程とそこから派生する文脈効果をベースにして関連性の概念を定義していくことになる。すなわち「文脈効果をもつことが関連性の必要十分条件であり」、人は直観として関連性の高い情報と低い情報を区別できると主張するにいたる。まず、特定の文脈において文脈効果をもたない明示的な想定が存在し(3)、こうした想定はその文脈において関連性がないことを示し、文脈効果は関連性の必要条件であるとする（「いまあなたはこの論文を読んでいる」等）。他方で、文脈効果をもたないのは明示的に示された想定にかざられるともいう。実際、先の例が示す非明示的な想定がもたらす文脈効果は、文脈効果を持たない明示的な想定を所在を示す証拠となることであり文脈を強化している。というわけで、「ある想定がなんらかの文脈効果をもつとすれば、その想定には関連性があると判断するのに十分である」

([SP: 1995=1999] p.119=143 頁)。

「関連性」は、なんらかの想定が一定の文脈で文脈効果が大きく、処理に要する労力が小さいほど文脈中で関連性が高い、というかたちで評価される。ただし、処理労力は常に処理労力が導き出す効果に比例するから、関連性を査定する場合にはそれを無視することができる。ところで、一般に文脈は所与のものと考えられがちであるが、あらかじめ文脈が決定されていると考えるとおかしなことが生じうる。理解の文脈に先行する発話が示す想定、あるいは推論から示されうる想定のみだけを考えると、明らかに説明のできないやりとりが存在する。たとえば、文脈が固定しているとすると、以下のようなやりとりで、メアリーの発言を理解するには、どこのレストランかを特定したうえに、その得意料理まで特定しなければならないことになる。

ピーター「疲れたよ」

メアリー「デザートはできているから、私がレストラン・カプリの名物料理を作るわ」。

しかし、文脈の中に受け手の百科事典的記載事項が含まれるとすれば、話し手の持ち出す新しい情報はすべて関連性を持つことになり、しかも、膨大な処理労力を要することになる、これは「相互知識問題」を再燃させかねない。だが「文脈もしくは理解の本質から考えて、文脈形成は理解過程の全段階で選択や修正を受け入れるという可能性を排除する根拠は何もない」([SP: 1995=1999] p.132=160 頁)。

スperlベル&ウィルソンは、発話を解釈していく過程で文脈も構築されていくと考える。直前の発話解釈を構成する想定のみを「初発の文脈」(initial context)としながらも、それを補う非文脈的な想定を利用していつでも文脈を拡張することができるというのである。そして、こうやって想定可能な文脈を拡張しながら、文脈の集合を限定し、そのなかから関連性の最も高い特定の文脈が想定されるとする。「新しい想定を処理するのに使われる文脈は、本質的には個人の古い想定の部分集合であり、新しい

想定がそれと結合して様々な文脈効果を生み出す」わけである（[SP：1995=1999] p.132=160 頁）。この詳細は以下のようなものだ。

①演繹装置の記憶内容の一部をなす直前の発話解釈を構成する想定集合（初発の想定集合から引き出せる非自明的含意）が「初発の文脈」となる。②直前の発話解釈に使われなかった想定は汎用短期記憶装置の内容として保存され、たとえば、人間が二つのことを並行して行う場合にはこうした「短期の概念記憶」が利用される。③直前の発話にいたるまでの以前の発話解釈の一部は「百科事典的記憶装置」の内容をなす。④「物理的環境から直接入手できる情報」、このうちの後者三つが文脈を拡張するのに利用される。推論過程一般、特に、理解のための文脈は、どの時点でも、これらによってある程度決定され、一定範囲の可能な文脈を決定する。そして、「特定文脈の選択は関連性を追求することでなされる」（[SP：1995=1999] p.141=171 頁）。「人は処理を受ける想定が関連性があると期待し、そして、その期待を正当化するような文脈、即ち、関連性を最大にする文脈を選ぼうとするのである」（[SP：1995=1999] p.142=171-2 頁）。

というわけで、演繹過程の最後には、個人は呼び出し可能な文脈の集合を手に行っている。この集合には部分的に序列がついており、それぞれの文脈は最低ひとつの小さな文脈を含んでおり、各文脈は最低ひとつのより大きな文脈に含まれている。だから、「呼び出し可能な文脈の集合は、一部、包含関係によって序列がつけられている」（[SP：1995=1999] p.142=172 頁）。そして、この包含の順序は「呼び出し可能性」の順序に対応する。初発文脈は直ちに与えられるので一度の操作で呼び出すことができる最も呼び出し可能性が高い文脈であり、一回の拡張操作を経た文脈は次に呼び出し可能性が高くなる。そして、文脈中の情報処理に労力を必要とするのと同様に、文脈の呼び出し可能性が低いほど労力もかからない。

そして、このとき個人にとって想定が関連性を持つのは、少なくともひとつの呼び出し可能な文脈で関連性を持つ場合である。さらに、想定はそれが処理されたときに達成される文脈効果が大きく、必要な労力が小さい

ほど関連性を持つ。つまり、呼び出し可能な文脈の集合から選択される最適の関連性をもつ一定の想定集合は、個人にとってもっとも文脈効果が高く、労力の低いものである。

ここでスベルベル&ウィルソンはより断片的な度合いの低い例文を使って関連性の定義をすすめようとする。ここで仮定されている初発文脈で受け手に一定の想定が生み出されると（「今日は疲れたよ」他→ピーターはメアリーに食事を作ってほしい）、あわせて他に可能性のあった想定が消去される一方、文脈を拡張するための情報塊（information chunk）を付け加えられるようになる（たとえば、ピーターは外科医である、冷蔵庫に何があるかや食事にはデザートも含まれること、メアリーはオツプブコを食べたい等々）し、それはさらに拡張された情報を呼び出し可能にする（外科医学やオツプブコについての百科事典的情報等々）。これらは、最初に文脈を拡張した情報が一回の検索で呼び出し可能であったのに対し、二回の検索で呼び出し可能になるといった具合に何段階にも渡って検索し、情報を拡張することが可能である。

受け手は初発文脈と関連性のあることを考え、会話を引き継ぐことになる。

①「私が食事を作るわ」

と答えればそれは二人にとって関連性のある事柄になる、

②メアリー「私はオツプブコが食べたいの」、

ピーター「キミが食事を作ってくれないかな」

と展開すれば、初発文脈を強化することになるし、

③ピーター「キミも疲れているなら、レストラン・カプリに行こうか」

と展開すれば、初発文脈全体と関連性が出てきて（ピーターはメアリーに食事を作ってほしい）という想定が削除されるのみならず、百科事典的情報塊として（レストラン・カプリではオツプブコが食べられる）という想定を呼び出し可能にする、

④ピーター「今日は冠状バイパス手術だったんだ」

と展開すれば、初発文脈とは直接には関連性は持たないが（冠状バイパス手術はしんどい）という外科医学について百科事典的情報塊で拡張した文脈では（ピーターは疲れている）という文脈を強化するので関連性を持つ。さらに、

⑤ピーター「キミが食事を作ってくれないかな。そういえば、冷蔵庫にチョコレートムースがあったね」

と展開すれば、（冷蔵庫にチョコレートムースがある）という食事についての百科事典的情報塊が明示されるので文脈を拡張することなく、（デザートは作らなくてよい）という想定を強化することができる等々といった具合にである。なお、ここで行われている論理的操作はすべて演繹であることを確認しておこう。

このようにスペルベル&ウィルソンよれば、受け手は直前の発話解釈を構成する想定集合や文脈を限定し（でなければ、相互知識問題が再燃する）、それを初発の出発点として呼び出し可能になった情報塊を参照にしながら関連性を最適なものにしようとする。「個人は関連性のある現象に注意を払い、関連性を最大にするやり方で現象を処理する傾向がある」というわけである（[SP: 1995=1999] p.150=183頁）（183）。

しかし、このような説明的事例をみるかぎり、かつて西阪仰が指摘していたように、初発文脈の想定範囲やあわせて呼び出し可能になる情報塊の範囲がどのようにして決まるのかという疑問が残る。事例ではこれらはいずれも仮定されたものにすぎない。言い換えるなら、説明するサイドが暗黙のうちに関連する項目を想定して議論を展開しているだけではないかという疑問をぬぐえない。このとき直観として定義される「関連性」という概念は現象とどのようにかかわっているのだろうか？

ちなみに、スペルベル&ウィルソンは、人工的な文例を用いることについて、①百科事典的情報の呼び出しが可能になる、②場面を説明したり、先行発話を想像してもらうことで文脈の要素を一部提供できるが（実例を用いても個人の認知環境を再現できるわけではないのでさしたる違いは生

じないのではあるまいか)、③文脈効果よりも労力が重んじられがちになる ([SP: 1995=1999] p,185=225 頁)。つまりは、関連性の原則と矛盾しない文脈を生み出しがちになると述べている。だとすれば、関連性理論は先の疑問を十分払拭できているかどうかはよく分からないということにならないだろうか？

このとき「関連性」理論は、あらかじめ関連性の説明が可能になっている事例から示される想定をなぞっているだけか、現実の現象とまったく関わりをもたない純理論的な説明のいずれかになる。これはいずれにしてもトートロジーになる。もっとも、スペルベル&ウィルソンは「関連性の直観的判断は決定的なものであるとは考えていない」という保留をつけてはいる。また、この点でブレイクモアは「彼らは、英語の関連性という語を定義しようとしているのではなく、彼らの目的は、関連性をもつ普通概念に近似する精神の過程の特質を提示することである」と説明している ([DB: 1992=1994 p,137=50 頁])。

4, 「意図直示的刺激」と「関連性の見込み」

さらにスペルベル&ウィルソンは関連性は単に心のなかで抱く想定がもつ特性ばかりではなく、周囲の環境の中にある事実をめぐる想定構築につながる現象の一つの特徴であることも示そうとする (「公共的表象」)。個人の認知環境はその人にとって顕在化している事実すべての集合であり、現象は一定の事実を顕在化し、個人の認知環境に影響を与える。その結果、特定の事実を強い想定のもとに心に表象し、さらに多くの想定を引き出すことができる。

現象は多くの想定を引き出すかもしれないが、全ての想定が立てられるということはない。たとえば、われわれの聴覚は選択的に働く。といった具合に、一般的には、排除されるのは関連性のなさそうな現象であり、優先的に注意を向けられるのがいちばん関連性のありそうな現象である。つまり、知覚機構自体が関連性志向的である (しかし、スペルベル&ウィル

ソンの「関連性」概念を採用するかぎり、この説明は事実上知覚機構の特徴を定義することになっていると思う）。そこで、「現象の関連性」は、顕在化する想定のうち少なくとも一つが個人にとって関連性のあるものであれば、その場合にかぎり、現象はその人にとって関連性を持つ（[SP: 1995=1999] p.152=185 頁）。さらに、現象は、最適に処理されたときに得られる文脈効果が大きく、最適に処理する労力が小さいほど、個人にとって関連性が高いと定義を拡張できる。

「刺激」は認知効果をあげるように仕組まれた現象である。このなかで、情報意図を相互に顕在化するのに使われる刺激を「意図直示的刺激」と呼ぶ。「意図直示的刺激」は、単に受け手の注意を引くだけでなく、受け手の注意を送り手の意図に集中させなければならない。さらに、「意図直示的刺激」は、受け手の注意を送り手の意図に集中させなければならない以上、最適な処理に結びつくぐらい顕在的、かつ関連性のあるものでなければならない。そのうえで、送り手の意図を受け手に明らかにするためには、「関連性の保証」とでも呼ぶものが伴う必要がある。送り手は、意図直示的なコミュニケーションによって、受け手の注意を払うに値するだけの関連性があることを示唆できなければならないが、これは送り手にとってのみならず受け手にとってもあてはまる。言い換えるなら、その刺激が受け手にとって関連性があるということは送り手にとって顕在的であるばかりか、相互に顕在的である。すなわち「意図直示的コミュニケーション行為は自動的に関連性の見込み（presumption of relevance）を伝達する」（[SP: 1995=1999] p.157=191 頁）。

このとき、関連性があると見込まれる内容は、少なくとも刺激を処理するに値するだけの効果を持ち、また、この効果は少なくとも労力をかけるに値する程度のものである。もちろん、聞いて見れば退屈な話だったということはある。だから、このとき伝達したい想定集合は、実際には、受け手が注意を払うほどのものではないかもしれないが、想定集合を推論可能にするには、関連性の見込みは十分にあると見込まれるようにしなければ

ばならない。このとき「最適な関連性の見込み」が成立しているとされる。「関連性の原則」：「すべての意図直示的コミュニケーション行為はその行為自体の最適な関連性の見込みを伝達する」(SP: 1995=1999) p,158=192頁)。ただし、この「最適な関連性の見込み」は反証されたり確認されることはあっても、立証されることはない。

もっとも、議論の最中に脇から話しかけられて、本来の話題から逸れることにはなるが、些細なこととは言え他の事柄にいますぐ答えていた方が好都合なことがある。つまり、関連性の高さよりも情報処理の効率性を優先するような場合があるが、このような場合は全体の関連性の貢献することになる。あるいは、会話の出だしのように（たとえば、お天気の話等々）、たいした関連性はなくても、引きつづくやり取りを進める上で好都合になるようなトピックがある。この場合も全体の関連性を高めることになる（ここでも全体の関連性の範囲はどう決まるのかがよく分からない）。「何を十分関連性があるとみなすかは、情報が時間の経過の中でどういう形で受け手に呼び出し可能になるか、あるいは呼び出し可能にできるかによって異なる」(SP: 1995=1999) p,160=196頁)。

ところで、送り手が何か伝えたいことがあるという以上のことを伝えてこない場合がある。すなわち、伝達者が相互に顕在化する意図をのぞけば（伝達意図）、伝達される想定集合（情報意図）が間接的なものばかりということがある。しかし、そのような場合でも、受け手は理解過程の最後には直接的な仮定を得ているであろう。つまり、想定集合（情報意図）を同定する際、受け手は送り手が理に適った伝達をしていると考える十分な根拠があると考えている。逆に、理に適った送り手は、受け手の情報処理で関連性の見込みが顕在化すると期待しているはずである（合理性の仮定）。

では、このとき、受け手はどうやって想定集合（情報意図）について可能な解釈仮説をたて、正しいものを選ぶのだろうか。このとき、すべての想定を列挙するというのはその可能性という観点からも、労力という観点からも考えにくい。そもそも関連性は仮説が検証される順番に影響してい

る。だから、スペルベル&ウィルソンは、「関連性の原則は、単一の意図直示的刺激に対して二つ以上の解釈の選択をふつうは許さない」という（[SP: 1995=1999] p.167=204 頁）。とはいえ、異なる解釈が受け手に同時に浮かんだり、送り手が関連性の見込みを取り違えていることもありうる。つまり、関連性の原則は理解にあたってひとつずつ方略を試すこともできるのである（[SP: 1995=1999] p.170=208 頁）。

ただ、このとき実際に個々人が関連するいくつかの可能性を絞り込もうと思えるときの方略の適用順序が、スペルベル&ウィルソンの言う「関連性の原則」に対応していると言えるのはなぜだろうか？あるいは、ブレイクモアは、談話連結語が文脈効果をもたらす「手続き的」な語彙として推意を制約するケースがあることを指摘し、① so や therefore は文脈含意を導入する、② after all や moreover, furthermore, also は付加的な証拠を提示し文脈を強化する、③ however は否定を導入する、④ too や also は提示された情報と同じようなやり方で関連性を有する付加的な情報を与える並行的な文脈効果をもたらす、という四つの場合を紹介している。が、このような説明は既存の自然言語の用法に寄生することなしには不可能であろう。とすれば、ここで行われている作業は何なのか？すでに、説明可能になっている現象に「関連性の原則」を適用しているだけということにはならないだろうか？

他方、送り手は意図直示的刺激により、情報意図で一定の集合を聞き手に顕在化しようとするが、このとき伝達意図でもって情報意図を相互に顕在化する。伝達意図を達成することで情報意図の所在がわかれば、意図直示的伝達に従事する理由が説明できるからである。言い換えれば、このとき関連性を保証するのは当の刺激が与えられる「動機」（情報意図）の想定であると考えることができる。なお動機（情報意図）が想定できるなら、当然、当の刺激に「関連性」があるという理由や証拠となる。しかし、このように「動機」を説明変数にすれば「関連性」は日常言語の範囲に落ちてしまうであろう。

4、「表意」と「推意」、**「詩的効果」**

このように、スペルベル&ウィルソンによれば、「言語（文法に支配された表象体系）」の本質はコミュニケーションではなく「情報処理」にあり、言語使用に関するのは伝達作用ではなく、なによりも「認知作用」にある。言語は人間のみならず情報処理能力をそなえた動物や機械にもそなわっている（しかし、これは説明というより定義である）。ちがいは、伝達的手段として人間以外の動物が言語を用いるかどうかである。コードによらないコミュニケーションが存在し、しかも、伝達手段ではない言語も存在するから、言語はそもそもコミュニケーションと必要十分な関係にすぎない。たしかに、言語は伝達装置に必要な属性ではあるが、内部言語を介した推論過程に従属している。言語によるコミュニケーションはただ正確さと複雑さを増大させるのに貢献する。というわけで、推論によるコミュニケーションが自然言語（外部言語）の発達以前に存在していたことになる。

他方、発話は思考の解釈であり、物理的環境を改変する。コミュニケーションは、思考を複製するのではなく相互認知環境を拡大する。このとき、言語による刺激がコード解読の自動的な過程の引き金となる。言語的コミュニケーションは、話し手が何かを言っているということではなく、話者（「送り手」）が誰か（「受け手」）に何かを言っていると認識されたときにはじまる。ところで、繰り返しになるが、誰かが「送り手」になれば、そこには当然、なんらかのメッセージを送る「動機」や「理由」があると推論可能になるはずである。

ともかく、受け手は送り手が顕在化した想定のを顕在化するか特定する必要があり、その最初の課題は発話に唯一の命題形式を与えることである。このとき、発話が表現する命題形式を生み出すには、「曖昧さの除去」や指示表現への「指示対象の付与」さらには、意味表象を「拡充（肉付け）」（enrichment）するような推論が必要になる。このどの段階でも労力の少ない解決法が採用され、これは関連性の原則と一致する。ここで

も、問題になるのは「送り手」や「受け手」のおかれた文脈ではなく、発話の文脈であり、「送り手」や「受け手」にかかわる事象も発話の文脈の一部を構成する。

さらに、命題形式の法性（「平叙法」等々）、さらには命題態度（を表す想定図式）を推論により同定して想定を構築する。この過程を「論理形式の発展」と呼ぶ。ここで明示的なコミュニケーションと非明示的なコミュニケーションの区別が可能になる。すなわち、発話が伝達する想定が、発話によってコード化される論理形式の発展であるとき、その想定は明示的である。これは「表意（explicature）」と呼ばれ、論理形式をコード化しない意図直示的の刺激がもたらす「推意（implicature）」と区別される。ブレイクモアによればここで「意味論」と「語用論」の区別がなされる（[DB: 1992=1994] p.47=74 頁）。しかも、表意は必ずしも真とはかぎらないので、真理条件を「意味論」の構成要件としていない（これはグライスやD・ウィルソンの議論にそったものでもある）。このように、発話の表出命題の明示化にあたっては推論が必要とされ、いわゆる「字義通り」の発話（コード解釈）とそれ以外（推論）という形で、「表意」と「推意」を区別しないのがスペルベル&ウィルソンのユニークなところである。もちろん、表意の明示性の度合いには程度の差がある。

「推意」とは、送り手が、発話を顕在的に関連性あるものにすることで、受け手に顕在化させようと意図した文脈上の想定ないしは含意である（「キミのレポートはコピペの切り貼りだ」）。推意は「推意的前提」と「推意的結論」の二つに区別される。「推意的前提」は、記憶やそこから検索された想定スキーマから構築されるもので、関連性の原則と合致する（コピペは不正行為である）。「推意的結論」は発話の表意と文脈から演繹される。推意が同定可能なのは、送り手が発話で顕在的に関連性を持たせようと意図していたことを、受け手が少なくとも一部は演繹できると送り手が予期していたはずだからである（このレポートでは単位が出せない）。

「推意の中には聞き手がほぼ間違いなく復元できるほどつよく顕在化さ

れているものもある。また、それほど強く顕在化されないものもある」(ISP: 1995=1999) p.197=239 頁)。これは、受け手の演繹過程に対する送り手による拘束が強くなればなるほど推意は強いものになり、逆に、推意が弱ければ弱いほど、受け手は自分が補充する前提や結論が送り手の思考を反映しているということに自信が持てなくなることに対応している(DB: 1992=1994) p.129=181 頁)。いずれにせよ、発話をそのまま処理する以上のコストを追加的にかけても文脈効果を生み出す可能性のあるものが推意をもつ。また、こうしたケースでは受け手が文脈を追加的に補っていかなければならないことがよく分かる。

さらに、文脈効果と処理労力という二つの可能性を考慮に入れるとこの延長として「文体」(や「話し口調」)の説明力ある理論を提供する鍵になる。「発話には構成要素構造、発話内の順序、焦点矯正があり、発話は時間の中で処理されるとすると、このような構造的な特徴を利用する最もコスト効率のよい方法が種々の語用論的效果を生み出すのである。言語構造と語用論的解釈には自然的なつながりがある」(ISP: 1995=1999) p.217=265 頁)。文体とは関係であり、送り手と受け手はある程度の相互性を共有しており、それが文体によって示され、伝達されることがある。たしかに、どれだけくだけた話し方をするかといった問題はこの点を説明する。

最適な関連性を目指す送り手は、受け手が明示的に処理するのに必要な労力より少ない労力で補充できる確信は暗黙のままにしておく。こうした情報が多ければ多いほど、送り手は受け手との間に存在する相互理解の程度がそれだけ高いと考えていることを顕在化している (ISP: 1995=1999) p.219=267 頁)。もっとも、話し手がこの相互理解の程度を評価することはそれほど容易なことではない。見下しているように聞こえたり、無礼に聞こえたりすることにもなりかねない。とはいえ、上記で述べたように親しい者同士のやりとりでは、一見すると内容がすかすかのくだけた会話が容易に行われている。そして、この程度はお互いの立場にかなり相関している。いずれにせよ、「文体は関連性を追求する際に生じる」(ISP:

1995=1999] p.219=267 頁)。

一例として、「反復表現」は単なる強調表現というよりは、聞き手に文脈を拡張し、さらに推意を付加するように促すことで文脈効果の増大をうながしている（「絶対にない、絶対に」）。反復表現は、送り手の心的状態や感情を単に描写しているというよりは提示しており（「イエー、イエー」）、言い換えると失われる非命題効果を生み出している。追加の関連性が文脈を多様に拡張したり、弱い推意を多く挙げることで達成されやすくなることがある（「むかし、むかしの話だ」）。この関連性の大部分を無数の弱い推意によって達成する発話特有の効果を「詩的效果」(poetic effects)と呼ぶことにする（たとえば、並行的な文脈効果）。詩的效果は、弱く顕在化している多数の想定の顕在性を少しばかり増しており、そのことにより共通の知識よりも「共通の印象」、「情緒的な相互性」をもたらす。もっとも、受け手はその分だけ想像力を働かせる責任を負うよう促される。

5、「記述」と「解釈」、アイロニーとメタファー

これまで取り上げてきたケースはほとんどの場合、表意が命題形式をとるものであった。しかし、「修辞表現」や間接的発話行為のように発話の命題形式が表意とは異なるものがある（「キミは本当にかしこいね」）。スペルベル&ウィルソンは修辞表現や文彩と発話内の力について統合的な見方を提案しようとする。

まず、意図直示的なコミュニケーションで用いられる刺激はほとんど表象である。認識可能な表象には知覚環境のなかで具体化していない概念や想定図式も含まれる（そこにいない誰かのマネをする）。同様に発話も似ているものを表象するために用いることができる（「彼は何て言ったんだい？」「アサニシマサ」）。そこで、①この命題形式を持つ表象がその状況にあてはまるということから状況を「記述的」に表象できる場合がある（「記述」）。他方で、②二つの命題形式が類似していることから、他の命題形式

をもった表象(たとえば、思考)を「解釈的」に表象できる場合がある(「解釈」)。「ソクラテス」は5文字である」。なお、解釈文として成立するために二つの命題がどれだけ似ていなければならないかは関連性の原則に依存する。

さて、この解釈的用法であるが、あらゆる発話は送り手の思考の表象であり、だからこそ受け手が似たような思考を抱く可能性がある。発話と思考の関係は同一性というよりは「類似的」なものなのである。つまり、発話の命題形式は思考の「解釈」である。そして、話し手の思考は「記述的」にも「解釈的」にもなる。「すべての発話は最も基本的なレベルにおいて、話し手が伝達しようとする思考に対する、多かれ少なかれ、忠実な解釈であると我々は主張した。解釈された思考が、それ自体ある事態の真の記述として心に抱かれるとき、発話は記述的に使われている。一方、解釈された思考が、さらにある思考、例えば他に帰属する思考や関連性のある思考の解釈として心に抱かれるとき、発話は解釈的に使われている」(SP: 1995=1999] p,282=317 頁)。

記述的に用いれば、「現実世界の状況」を記述したり、「望ましい状況」を記述したりできる。解釈的に用いれば、「他の誰かに帰属する思考や発話」を解釈したり、「望ましい思考」を解釈したりできる。たとえば、「メタファー」は発話の命題形式とそれが表象する「送り手の思考」とのあいだに解釈的な関係があり、「アイロニー」は送り手の思考と「誰かに帰属する思考や発話」とのあいだで解釈的な関係にある。「断定文」は話し手の思考と「世界の状況」のあいだに記述的な関係があり、「要請文」や「助言文」には話し手の思考と「望ましい思考」との間には記述的な関係があり、「疑問文」や「感嘆文」には話し手の思考と「望ましい思考」の間に解釈的な関係がある (SP: 1995=1999] p,282-283=317 頁)。

ここで「字義的」であるとは送り手の思考の解釈が、その思考と同一の命題形式を持つ場合とする。このとき思考の最適な関連性をそなえた解釈表現が「字義通り」のものとはかぎらない。実際、面と向かって言えない

ことというのは存在する。そのときは、曖昧であったり、遠回しな表現が用いられるであろう。あるいは、「いま5時5分前だ」としても、「いま5時だよ」ということが許容される文脈はいくらかもある。このような「緩いおしゃべり」(loose talk) が流通している以上、受け手は、完全に字義的であることが関連性の見込みを確認できるときにかぎり、発話を完全に字義的に解釈すべきであるということになる。

そして、この「緩い用法」と「メタファー」との関係は連続的なものであり手順の違いはない。ただ、潜在的な推意の幅が大きければ大きいほど、そして受け手が推意を構築する責任が大きいくほど、その効果はより詩的となり、メタファーとして独創性をもつようになる。実際、通例化しているようなメタファーでも言い換えれば、そのニュアンスは抜け落ちてしまう。メタファーでは緩く使用された表現が広範囲にわたる容認可能な推意を決定するところにその驚きや美しさがある（ちなみに、D・デイヴィッドソンは、メタファーを絵画に類比し、それが「字義通り」の表現であると述べている）。

以上の説明は、発話で解釈される送り手の思考自体が二次的な解釈であるということに負っている。メタファーは送り手の思考の二次的な解釈を与える。あるいは、送り手が誰かの発言を念頭において、それに対して何らかの態度を採っていることを知らせることで関連性が達成されることがある（「急いではことをし損じる」）。もちろん、この誰かは特定の人物でなくてもかまわない。こうした解釈は「こだま的」発話（エコー）であると言われる。そして、アイロニーはこうした「こだま的」解釈の一例である。「責任は私にあるってさ」（「責任は総理大臣である私にある」）。これらがアイロニーとして通用するのは、あざけり等の調子を加え、「こだま」（エコー）している思考から送り手が距離をおこうとしているからである。とはいえ、アイロニーでは話し手の態度は非明示的なので、多くの場合、読者を惑わせるものであり、不合理な結論にいたって新しい解釈にいたる（4）。

6. 発話行為について

最後に（といってもスペルベル&ウィルソンの書物の順番通りにすすんでいるだけだが、それなりの理由はある）、発話行為論について見ておきたい。関連性理論は発話行為論にとって代わるものとして提起されており、実際にも、営まれているのが認知環境をめぐる情報処理なのか行為の遂行なのかは説明に大きな違いをもたらす。スペルベル&ウィルソンの議論が発話行為論の十分な代替えになっているかどうかは、ここまでも疑問を示しながら紹介してきた関連性理論の説明力を評価するうえで大きな指標になると思われる。本稿はこの点を吟味することでさしあたりの関連性理論の概観の終着点としたい。

まず、「洗礼」や「命名」のように聴衆が発言の意図を理解しなくとも成立する発話行為があり、これはコミュニケーションとは言えない(だが、誰かに向けられているのではないだろうか?)。また、語用論の中心とみなされてきた発話行為は二つのいずれかのカテゴリーにわけられるとされる。一つは、約束や賭け、宣言や感謝である。これはこうした行為が慣行として必要とされる社会においてのみ見いだされるもので、それと認識されなければならない。スペルベル&ウィルソンは、明示的には指摘していないが、こうした発話行為の線引きにあたってエミール・バンヴェニストの議論をほぼ継承している。バンヴェニストによれば、遂行的言表文の第一次定義として提起できるのは、「職権にもとづく行為の領域」、ならびに「それを言表する人に対して個人的な責任を課する場合」(約束など)である ([Benveniste: 1966=1983] 259 頁)。

対照的に、断定、推測、提案、申し立て、否定、懇願、要求、警告、脅迫などは(「挿入動詞」として使える一方)、首尾よく遂行されるためにそれを意図したものとして同定される必要がなく、推意にかんするなんらかの条件によって同定可能な行為(非コミュニケーション行為)だという。たとえば、断定と推量の違いとは送り手の言質の強弱の問題であり、それと同定されようとされまいと発話を処理できればよい。たしかに、これら

を明瞭に区別する必要がない場合もあるだろう。しかし、断定と推量の帰結はまったく違ったものになりうる。推量を断定ととられたのではときとしてたまったものではあるまい（「甘利の話はあくまでも推測だ。それだからといって責任を免れるわけじゃない」）。送り手は必要があれば自らがどちらを意図したものであるか「定式化可能」であり、実際にその必要が出てくれば、明示的にすることで当の行為の文脈を補足・強化できる。ブレイクモアがあげている、真偽を問える「埋め込み命題」に挿入動詞として注釈を入れる作業はこうした定式化の一つと言える（「甘利ははめられたんだ。ボクはそうじゃないかと思うよ」）。

さらに、二つのいずれにもふくまれないものとして、言述（say）、指示（tell）、質問（ask）があげられている。これらは、それぞれ形式上は平叙文、命令文、疑問文に相当するが、そればかりでのみ用いられるとはかぎらない。たとえば、断定文をはじめとする平叙文から間接的な証拠を与えたり、話し手の態度を表すことに関連性をもたせることができる。あるいは、平叙文は命令や質問として利用できるし、同じようなことは命令文や疑問文についても言える。さらには、いずれも記述的にも解釈的にも使える。では、どの発話がどのタイプにあてはまるとどのようにして分かるのだろうか？ブレイクモアは関連性からと答えるが、似たようなことは「定式化」や「動機」からも説明できるだろう。

疑問文は願望的思考の解釈であるとされる。送り手にとって質問の答えは当然、質問と関連性がある。つまり、疑問文は真であれば関連性があるとみなす答えの解釈である。このとき yes/no 疑問文では、論理形式ならびに完全な命題形式をそなえているが、Wh 疑問文は論理形式をそなえていても命題形式は不完全である。そこで、Wh 疑問文は完全な命題形式そなえた思考を完成へ導く手立てがあることを伝達するものとして分析できる（「なぜ甘利は金を受け取ったのでしょうか？」）。これを感嘆文として用いれば命題形式を完全にしたものが真であることが示される（「なんで甘利は金なんか受け取ったんだ！」）。しかも、修辞疑問文や解説疑問文のよう

に、送り手があらかじめ答えを知りながら質問するということがある。たとえば、口頭試問。この場合は、送り手が提供すべき情報を有しているということ、つまり、受け手に関連性があると送り手が信じている答えの解釈としてなされるのである。言い換えるなら、本題の「前置き」として使われている。

命令文（行為指示型）については、事象が潜在的かつ願望的であることを記述するのに使用される。願望は誰にとって望ましいかという観点から、助言型と要請型に区別できるが、スペルベル&ウィルソンによれば、この二つは、描写されている状況が①送り手からみて望ましいか、②受け手からみて望ましいかの認識を示しており、いずれにも当てはまらなければメタファーのようなものになるのだという。

たとえば、情報意図として把握しうる事態の描写が、受け手にとって好ましいことであれば、助言したり提案したりする場面（「戸棚にお菓子があるよ」）に相当するだろうし、それが送り手にとっと好ましいことであれば、命令したり依頼したりする場面（「戸棚の上の箱に手が届かないんだよ」）に相当する。そうすれば、その情報意図が命令なのか依頼なのか、あるいは助言なのか提案なのかといった違いは、受け手に想定される選択肢に何も影響を与えないというわけである。ただし、ブレイクモアは「命令を嘆願や依頼から区別するのは話し手と聞き手との社会関係に関する文脈想定による」とも述べている（[DB: 1992=1994] p.113=158 頁）。さらに、ブレイクモアは命令文のケースとして「祈願」（good wishes）をあげており、これは話し手も聞き手も事象を引き起こす立場になく、事象が聞き手にとって望ましいと話し手が信じている点に特徴があるという（「あなたがよい相手にめぐまれますように」）。

以上のように考えることができるのなら、約束の類についても、依頼や命令のような場面に続いて、送り手にとって好ましい事態の実現可能性を主題化することで、実現が先送りされたことを理解可能にすること（「あとで取ってあげるよ」あるいは「代わりに取ってくれるんだね」）がもと

になっているように思われる。もちろん、誓約のように先行する依頼や命令が存在しない場合もある。だが、そうした場合でも、誓約する相手は誰でもよいというわけではない。基本的に、神であれ誰であれ、選ばれるのは誓約された事態の生起を望ましいと受け取ってくれる相手にかぎられるであろう。そうでなければ、なぜ相手に誓約する必要があるのかが問題になってくるはずである。

この誓約は先の「祈願」(good wishes) とよく似ていると思われるが、ブレイクモアは聞き手の有無、つまりはコミュニケーションかどうかメルクマールとなると考えている。しかし、「祈願」の「受け手」は本当に「聞き手」なのだろうか？たとえば、神社仏閣で同じような「願い事」を口外すれば（あまりあることではないだろうが）、境界的なケースになるように思われる。「呪ってやる」というのも同じようなものではないだろうか？バンヴェニストはこう述べている。「たとえば「今日は」は、その完全な形「あなたのために良き日を祈ります」においては呪術的な意図をもった遂行文の、もとの荘重さと呪力を失ったものなのである」([Benveniste: 1966=1983] 257 頁)。

それから、判決を下すようないわゆる「宣言型」と呼ばれる発話行為も、「アイツを死刑にしろ」「オマエは辞めろ」といった命令あるいは依頼の間接化された表現であるように思われる。たとえば、もともと裁判官は、主権者（神、王、国民等々）の代理人として、主権者が下すはずの命令を付度する立場にあると言ってよい。このとき、裁判官は、主権者にとって望ましい事態を本人に成り代わって述べていると考えることができる等々。

このように、約束や宣言のようなものも、依頼や命令の延長として考えることができるように思われるのだが、このような拡張的説明を採用したいのは以下のような事情があるからでもある。まず、繰り返しになるが、宣言型や誓約について説明しようとする、誰もが誰にでも判決を下したり、誓約したりできるわけではないということがある。それぞれの活動はそれぞれ一定の立場と結びついてなされているのである。判決を下すこと

が意味をもつのは裁判官が法廷で案件を処理する場合であり、われわれ個々人が勝手に判決を下すことはできない。誓約する相手も同様である。約束にしても、われわれは誰とでも約束できるわけではない。たとえば、天皇陛下は私に約束することができるが、私が天皇と約束することは、なんとおこがましいこと云々となりかねない。たしかに、これは握手するときどちらから先に手を差しよべるかといった話とよく似ていて、スペルベル&ウィルソンも言うように、ここでは社会的な慣行が大きな意味を持つ。

とはいえ、同じ問題は、程度の差はあれ、助言や提案、依頼や命令についてもあてはまる。助言をする立場と提案をする立場は異なっている。誰もが誰にでも命令ができるわけではないし、命令する立場と依頼する立場も異なっている。同じことは、たとえば要求、警告、脅迫についても言える。これらが可能になる立場はそれぞれ異なっている。ブレイクモアはこれを上下関係のような「社会関係の文脈」として言及している。

しかし、一定の発話行為をなす立場にある人間のカテゴリー、ないしはアイデンティティが当の発話行為の成立条件と結びついていると考えるとき、スペルベル&ウィルソンの言うような社会的な文脈の関連性としては説明できない。これはかつて西阪仰が機内でたばこを求める例を挙げて示した問題と同型である。

なかでも発話行為をとりあげる場合、とりわけ何かができる立場はかなり固定している。意図が認知できなかつたり、されなかつたりしても、当の発話で何をしようとしているのかはその必要があればいつも定式化可能である ([Garfinkel & Sacks: 1970])。そうなるとスペルベル&ウィルソンのように発話行為のカテゴリーの間に分割線を引く必要もない。これをあえて社会的関係にかかわる文脈前提に包摂し、受け手が話し手の意図を特定するという、個人の認知環境上の問題に還元する必要性があるのか、またそれが妥当なのかどうかは疑わしい。ここでも、スペルベル&ウィルソンは自らが定義したそれとは違った「関連性」概念を持ち込んでいるの

ではないか。

7. 表象の疫学—終わりに

いささか脇道にも反れたが、こうして概観してみれば、「関連性理論」がもともとは象徴解釈の理論に由来し、それを包括するような理論構想として組み上げられたものであることが分かるだろう。では、人類学者としてのダン・スperlベルは「関連性理論」以降、どのような議論を展開していったのであろうか？これを『表象は感染する』（1986）に依拠しながら簡単に確認し、スperlベルの理論人類学と関連性理論の関係をより明確にして本稿を終えることにしたい。

冒頭で確認しておいたことからわかるように、人類学者が手にしているのは文化的事象を「解釈するための道具」である。たとえば、「婚姻」という概念は、なにか共通の一般的な特質を見いだせるようなものではなく、一種のリマインダーとして働く、「解釈上の類似性」を示すものである。「表象の内容を表象するためには、類似した内容を持つ別の表象が遣われる」（[DS: 1986=2001] 59頁）。

ところで、解釈される「文化的事象」には、「心的表象」と「公共的表象」（発話等々）が関与している。人間の個体群には多数の心的表象の個体群が宿っている。これらは送り手により公共的表象に変換され受け手によりふたたび心的表象に変換される。一連の表象は解釈であり、公共的表象と心的表象は互いに互いの解釈の対象となりうる。ここには認知能力とコミュニケーションが関与する。このとき表象の内容の類似性は観点とコンテキストで変化する。「われわれは毎日他人を理解しようと努めているが、真の理解の代わりに、部分的に推測混じりの解釈で間に合わせているわけである」（[DS: 1986=2001] 66頁）

では、ある表象（神話等々）が人間の個体群に「制度」として拡がりを見せるのはなぜか。「なぜ表象には、一般的文脈においてであれ特定の文脈においてであれ、蔓延するものがあるのか」（[DS: 1986=2001] 45頁）。

この因果連鎖を説明するのが一種の「表象の疫学」である。たとえば、生活にかかわる事例はそれだけ関連性を持ち、儀礼的慣習の遵守は、たとえ内容に見合った効果がなくても、危険から身を守る。少なくとも、周囲から不幸を引き起こしたと言われることはなくなる。だから、一定の社会に定着する。この過程で表象は変形する。「この過程はランダムな仕方では生じるのではなく、より少ない心的努力を要しより大きな認知的効果をもたらすような内容を生み出すような方向で生じる」(DS: 1986=2001] 90頁)。つまり、社会内部の表象は、それぞれの文脈において、関連性を最適化するように変形していくというわけである。

このように人間にはメタ表象（解釈）能力があり、これが知識や観念のレパトリーを拡張する。人間の心的表象は「直観的信念」（「基礎概念」）と「反射的信念」とに区別することができ、前者は推論装置の働きで知覚から導出され、後者は、直観的信念に埋め込まれ、「表象の表象」として信じられている。科学性や神秘性を持ちうるのは後者である。たとえば、われわれは量子力学の理論の詳細を知らなくても、その理論を信じることができるだろう。新しい情報を前に百科事典的記憶を呼び起こして関連性のある理解の文脈を構成すれば解釈がはたらくが、こうした解釈を受け付けられない表象は神秘的な性格を備えるようになる。いまでも宇宙論はしばしば神秘的である。

また、直観的信念は知覚とコミュニケーションに依存し、おおよそ共通するかたちで分布し、反射的信念（たとえば、神話）はもっぱらコミュニケーションに依存し、それぞれが異なるかたちで分布する（たとえば、「恵方巻」？）。これは、記憶の容易さや魅力、語り部（年長者や科学者）への信頼などを誘因として広まっていく。というわけで、反射的信念は、たとえばR・ドーキンスがミームで考えたように進化論的に広がるというよりは、「誘因子」のようなものがあると考えられる。

このように、スペルベルは解釈が表象を増殖させる一方で、その変化や分布には「関連性」が寄与すると考えている。さらに、スペルベルは、J・

A・フォーダーの議論をとりあげ、知覚過程のみならず概念装置もモジュールから説明できることを示そうともしている。しかし、スペルベルが行っていることも解釈であり、解釈とは一種の言い換えに他ならないから、解釈される対象との関係はトートロジカルになるではないか。だから、こうした解釈が変化や分布の因果連鎖を説明しているようには思えない（かつてのT・パーソンズ批判を想起させる）。ここにあるのはどうみても「どのように」である。スペルベルの議論はとてもユニークで面白く、かつ一定の説得力をそなえている。しかし、それはスペルベルがかつてレヴィ・ストロースを批判したように、説明として他にも可能な解釈の一つ以上のものにはならないのではないか？ 関連性理論でも表象の疫学でもこの疑念を拭えない。

注

- (1) こうした発想はすでにスペルベルの人類学の業績で確認できる。たとえば、([DS: 1974=1979] 196頁)。
- (2) しかし、これについては、以下のような指摘が可能ではあるまいか。無意識ではなく、あえて誰かに情報意図を流そうとするならば、誰かに伝達しようとしていること自体が暗黙にも想定可能でなければならず、つまりは、このとき伝達意図も措定可能になっていなければならない。言い方を変えれば、伝達意図を想定できないまま情報意図を想定することは可能だろうか？ 私は無理だと思う。そもそも伝達意図は「情報意図の情報意図」なのである。情報意図を把握できるなら、同時に情報意図についての思考の一つとして伝達意図が想定可能になっていておかしくあるまい。だとすれば、個人の認知環境を自然に改変することと意図的に改変することの間に明確な境界はないとしても、この二つは原理的には明確に区別可能でなければなるまいし、自然言語に依存しない推論が、自然言語の成立から独立した事象であるかどうかも吟味されてよいはずである。
- (3) ある想定が文脈効果を持たない、つまりは関連性がないとは、①想定がもたら

す新しい情報が既存の文脈のどの情報とも結びつかない場合、②想定がすでに文脈中に存在し、情報はその想定が強さに影響をもたらさない場合、③想定が文脈と食い違い、しかも既存の文脈を覆すには弱すぎる場合、である。ただし、これは発話によって明示された想定にかぎる。とはいえ、事実上、行論上で定義されているにすぎない、想定が明示的か否かでという区別をなぜ判断基準として適用できるのかは、よくわからない。

- (4) 橋元良明は、スペルベル&ウィルソンのこの議論を発展させて、アイロニーは「言及」(解釈)というより、他人の人称借りて発話する「仮人称発話」であると説明している。「アイロニーの正体とは、結局、字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し、結果的に「言及」とみなしうる陳述行為を行うという一種の「仮人称発話」なのだというのが本稿の結論である」([橋元：1989] 87頁)。

【参考文献】 (一部の文献のからの引用にあたっては末尾の略号を用いた)

- 芦川 晋., 2009. 「コミュニケーションにおける「伝達の意図」とその「理解」について——ポール・グライス再訪」 『社会学年誌』 50.
- Austin, J. L., 1958/1963. "Performative-Constative", in J. R. Searle (eds.) 1971. *The Philosophy of Language*, London: Oxford University Press, 13-22.
- Austin, J. L., 1962. *How to Do Things with Words*. Second Edition. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大 (訳) 『言語と行為』, 東京:大修館書店, 1978)
- Benveniste, E., 1966. *Problèmes de Linguistique Générale*. Paris: Editions Gallimard. (河村正夫・木下光一・高塚洋太郎・花輪光・矢島猷三 (訳) 『一般言語学の諸問題』, 東京:みすず書房, 1983)
- Blakemore, D., 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一 (訳) 『ひとは発話をどう理解するか』, 東京:ひつじ書房, 1994). [DB: 1992=1994].
- Cruse, A., *Meaning in Language, 3rd edition*, Oxford University Press, 2011. (片岡宏仁 (訳) 『言語における意味 -意味論と語用論』, 紀伊國屋書店, 2011.)

- Davis, S. (ed.), 1991, *Pragmatics*, Oxford U.P.
- Fodor, J. A., 1983. *The Modularity of Mind: An Essay on Faculty Psychology*, MIT Press. (伊藤笏康・信原幸弘（訳）『精神のモジュール形式—人工知能と心の哲学』、産業図書、1985)
- Garfinkel, H. and Sacks, H., 1970, On formal structures of practical actions, In J.C. McKinney and E.A. Tiryakian. (Eds.), *Theoretical sociology: Perspectives and developments*, pp. 337-366, Appleton-Century-Crofts.
- Grice, P., 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (清塚邦彦（訳）『論理と会話』、東京：勁草書房、1998)
- 橋元良明. 1989. 『背理のコミュニケーション』、東京：勁草書房.
- 東森勲, 吉村あき子, 2003, 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』、東京：研究社出版
- Jonson-Laird, P. N., 1983. *Mental Models*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. (海保博之（監訳）『メンタルモデル—言語・推論・意識の認知科学』、東京：産業図書、1988)
- Katz, J. J., 1966, *The Philosophy of Language*. New York: Harper & Row. (西山（訳）『言語と哲学』大修館書店1974)
- Lakoff, G., 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他（訳）『認知意味論—言語から見た人間の心』、東京：紀伊國屋書店、1993)
- Lakoff, G. & M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）『レトリックと人生』、東京：大修館書店、1986)
- Lakoff, G. & M. Turner, 1989. *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: Chicago University Press. (大堀俊夫（訳）『誌と認知』、東京：紀伊國屋書店、1994)
- Leech, G. N., 1983. *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Holland: John Benjamin B. V. (内田種臣・木下裕明（訳）『意味論と語用論の現在』、東京：

理想社, 1986)

- Leech, G. N., 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Ltd. (池上嘉彦・河上誓作 (訳) 『語用論』, 東京: 紀伊国屋書店, 1987)
- Levinson, S. C., 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子 (訳) 『英語語用論』, 東京: 研究社出版, 1990)
- Levinson, S. C., 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of General Conversational Implicature*. Cambridge: Massachusetts Institute of Technology. (田中廣明・五十嵐海理 (訳) 『意味の推定 — 新グライス派の語用論』, 東京: 研究社出版, 2007)
- 西阪仰, 1995, 「関連性理論の限界」『言語』24 (4) : 64–72.
- Recanati, F., 1987. *Meaning and Force: The Pragmatics of Performative Utterances*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Recanati, F., 1979, *La transparence et l'enociation*, Seuil. (菅野盾樹 (訳) 『ことばの運命』新曜社 1982)
- Recanati, F., 2004. *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press. (今井邦彦 (訳) 『ことばの意味とは何か』, 東京: 新曜社, 2006)
- Sadock, J. M., 1974. *Toward A Linguistic Theory of Speech Acts*. Free Press. (木下裕明 (訳) 『発話行為の言語理論へ向けて』, 文化書房博文社, 1995)
- 佐々木健一 (編) 『創造のレトリック』, 東京: 勁草書房
- Searle, J.R., 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊 (訳) 『言語行為 — 言語哲学への試論』, 東京: 勁草書房, 1986)
- Searle, J.R., 1979. *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press. (山田友幸 (監訳) 『表現と意味 — 言語行為論研究』, 東京: 誠信書房, 2006)
- Smith, N. & D. Wilson. 1979, *The Results of Chomsky's Revolution*, London: Pengin Book. (今井邦彦 (訳) 『現代言語学 — チョムスキー革命からの展開』, 東京: 新曜社, 1996)

- Smith, N., 1982. *Mutual Knowledge*. Academic Press.
- Sperber, D., 1968. Le structuralisme en anthropologie. In Wahl, F. (éd.).
Qu'est-ce que le structuralisme?. Paris: Seuil. 1973. (伊藤 晃 (訳) 「人類学における構造主義」、渡辺一民 (他訳). 『構造主義』. 筑摩書房, 1978. 所収).
- Sperber, D., 1974. Contre certain a priori anthropologique. in E. Morin & M. Piatelli-Palmarini (éds.). *L'Unité de l'homme*. Paris: Seuil. (足立和浩 (訳) 「人類学のいくつかのア・プリオリへの反論」荒川幾男 (他訳) 『基礎人間学 — 統合的人間像をもとめて (下)』. 平凡社. 1979)
- Sperber, D., 1974. *Le Symbolisme en général*, Paris: Hermann. (1975. Rethinking Symbolism. Cambridge U.P. 1975). (菅野盾樹 (訳). 『象徴表現とはなにか』. 紀伊國屋書店. 1979). [DS: 1974=1979]
- Sperber, D., 1982. *Le Savoir des anthropologues*. Paris: Hermann. (*On Anthropological Knowledge*. Cambridge U.P. 1985). (菅野盾樹 (訳). 『人類学とはなにか』. 紀伊國屋書店. 1984). [DS: 1982=1984]
- Sperber, D., 1986. *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Blackwell. 1996. (菅野盾樹 (訳). 『表象は感染する——文化への自然主義的アプローチ』. 新曜社. 2001). [DS: 1986=2001]
- Sperber, D., 2000. *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective (Vancouver Studies in Cognitive Science)*. Oxford University Press.
- Sperber, D. & D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Second Edition, Oxford: Blackwell. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) 『関連性理論 — 伝達と認知』, 研究社出版, 1993/1999). [SP: 1995=1999]
- Sperber, D. & D. Wilson, 1986. "Loose talk." in S. Davis. (eds.) *Pragmatics. A Reader*. London: Oxford University Press, 1991, 540-549.
- Sperber, D. & D. Wilson, 2002. Relevance theory. L. Horn and G. Ward (eds.). *Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.

菅野盾樹. 『メタファーの記号論』. 勁草書房. 1985.

Wilson, D., 1975. *Presupposition and Non-truth-conditional Semantics*. Academic Press Inc.

Wilson, D. & D. Sperber, 2012, *Meaning and Relevance*. Oxford University Press.

Wilson, D. & T. Wharton. (今井邦彦 (編訳) 『最新語用論入門 12 章』, 東京 : 大修館書店, 2009)

Vanderveken, D., 1990. *Meaning and Speech Acts Volume I*. Cambridge : Cambridge University Press. (久保進 (監訳) 『意味と発話行為』, ひつじ書房, 1997)

Vanderveken, D., 1994. *Principles of Speech Acts Theory*. Montreal : University du Quebec a Montreal. (久保進 (訳注) 『発話行為理論の原理』, 松柏社, 1998)

山梨正明. 1986. 『発話行為』, 東京 : 大修館書店.